

要 旨

常陸大宮市文書館（以下「当館」）は、平成 26 年（2014）に開館した茨城県内初となる市町村立の公文書館施設であり、廃校となった小学校の旧校舎を転用して設立された。当館では特定歴史公文書や古文書など地域史料を取り扱う施設であることから、資料の保存環境については細心の注意を払わなくてはならないが、旧校舎という資料保存に適さない施設を活用している以上、既存の専用施設と比べて十分な保存環境とは言えない状況が生じている。そのため、本論文では、旧校舎を利用した公文書館施設の文書保存環境について、IPM（Integrated Pest Management、総合的有害生物管理）の考え方を取り入れながら、当館の環境対策事例を温湿度管理と生物被害対策の面から分析、整理することによって問題点を洗い出し、改善策や今後の展望を提示することを目的とする。

第 1 章では、当館の保存環境を分析する前提として、館の立地や周囲の環境、建物構造や設備の現況について整理した。第 1 節では、当館の立地面について、山が近接する環境下にあることから、土砂災害の危険性や虫などの生物による館への侵入リスクが高いことを確認した。第 2 節では、当館の建物構造と設備について、資料保存に適した施設の基本要件となる 12 項目（耐震、防火・防犯、温湿度管理など）に沿って整理した。結果として、文書館施設としての要件を概ね満たしてはいるものの、保存書庫に空調設備が存在しない関係上、温湿度対策と生物被害対策の面で基本要件をクリアすることができず、課題が浮き彫りとなった。

第 2 章では、第 1 章の内容を踏まえ、当館の保存環境における問題点を抽出するため、温湿度管理と生物被害対策の現状について詳細な分析を行った。第 1 節では、当館がこれまで実践してきた環境対策として、除湿機の設置による湿度調整、施設修繕や清掃、クリーニングによる侵入防止対策について取りあげた。第 2 節では、これら環境対策の軸となる温湿度測定調査と虫トラップによるモニタリング調査について分析を行い、温湿度管理の面では、除湿機による湿度調整の効果が生じている一方で高温多湿の環境が続くことによるカビの発生リスクや遮熱、温度むらへの対策が必要になること、生物被害対策の面では、ヒメマルカツオブシムシをはじめとする文化財害虫が広範囲で確認されたことから、侵入経路の見直しやモニタリング調査の間隔を短くするなどの対策が必要となることを改めて認識した。

第 3 章は、第 2 章で洗い出した問題点を IPM による資料保存の観点に照らし合わせながら、環境対策の改善案や今後の展望について検討した。問題点の改善にあたっては、他館の事例を参照し、シートによる遮熱やデータロガーの複数設置による温湿度比較が有効であるほか、侵入防止対策の面では忌避剤やフィルターの使用、モニタリング調査の施行回数を短くし、文化財害虫の発生が確認された場所の清掃を徹底することが重要となる。特に清掃については、これまで計画性を持って実施してこなかったことに加え、対応する職員数の少なさから、業務が多忙となる時期には優先順位が下がってしまう場合があった。そのため、職員が常に保存環境について意識した取り組みに努めるとともに、全体的な総合計画の策定や日常的な点検作業の徹底が求められる。